
趣味は卓球です。

きゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

趣味は卓球です。

【Nコード】

N1947D

【作者名】

きゅん

【あらすじ】

卓球誰もが一度はやったことのあるスポーツだ。娯楽といったほうがいいのかもしいない。最近は福原愛選手の活躍などによりスポーツとしての卓球は見直されつつある。しかしやはり卓球へのイメージは明るいものではない。これはそんなスポーツとしての卓球に情熱を燃やすサラリーマン達の物語。彼等は日中は通常業務をこなし、夜になると真剣に卓球の練習に励む。オフィスビル対抗や市内の交流戦、決してレベルは高くはないが、真剣勝負の世界がそこにはある。彼等は胸を張ってこう言う。趣味は卓球です。

第一部 オフィスビル対抗編

第一部 オフィスビル対抗編

第一話

俺はとうとう新しい武器を手に入れた バッククロス 相手がバツクに打ってきた球をフォアに回り込んで相手のバックにクロスを打ち込む 緩いドライブ回転をかけるのがコツだ 白い弾道が駆け抜ける

これまで俺は七色のサーブに頼ってきた これだけでは素人にしか勝てない これを返された時が課題だった 俺は血のにじむような特訓を重ねた 相手が攻めてきたときにカウンターで返すバッククロス、これを身につけた俺達は強い これを返されたとしてもパートナーのユキオが必殺のスマッシュを決めてくれる ダブルスに最も大事なものの、それは信頼関係だ

俺の働くオフィスビルには多くの会社が入っており、5000人以上が働いている その頂点を決める戦いが行われる 出場チームは32チーム 明日はいよいよエントリーだ これまでユキオはベスト8が最高だ だが今年は違う 選手権は再来週から熱戦の火蓋が切って落とされる 5日間でチャンピオンシップを争う あと二週間、最高のパフォーマンスを目指そう 結果はついてくる

俺は甲子園球児のように高揚して組み合わせ抽選会に望んだ くじを引いた俺は血の気が引いていくのが分かった 昨年の覇者S総研 それと同じブロックになってしまったのだ 頂点を目指すからには避けて通れない相手だ まずは一回戦突破 全力を尽くそう

大会1週間前の今日から大会会場で練習ができる ライバル達の間も光る中、チーム練習を行った 七色のサーブは大会当日まで封印 勘がにぶらないように道場での練習はかせない パートナーのユキオと組んだ時には相手を10点以下に抑えて勝つ これが自らに科した課題だ しかし1ゲームだけ13点とられてしまった一瞬たりとも気をぬいてはならない

しかし自分のチームにスポーツマンシップに欠ける人間がいるとは思わなかった カオリはプレイは悪くないのだが試合中の相手に野次をとばす 相手のミスを思いつきり笑う 俺はこういう人間は好きではない そう思っているとなんでもないサーブミスが出てまた笑われる 悪循環だ バッククロスの精度も悪い 結局今日の練習試合は散々だった メンタルの弱さが出た 全力を尽くし相手のよいプレイは称えあう そう願っていても初めての選手権にはこのような相手がいるかもしれない そう思えばよい練習であった 明日からは朝練だ

金曜日の今日は最後の追い込みだ 1回戦は来週の火曜 週末からは調整に入る 昨日は俺が左足をつり、今日はユキオの左足が上がらなくなっている 練習相手のタカも肩が上がらない この日はタカを相手に2対1で集中した練習を行った タカは昨年度準優勝の実力者だ そのタカを相手にダブルスでゲームを組み立てるのは難しい シングルのほうが全て自分の考えでゲームを組み立てられるので有利な面がある 俺とユキオの作戦はこうだ 俺がバッククロスで攻め、ユキオが必殺のスマッシュを決める 俺のバッククロスで決まることも少なくない しかし、この日のタカは違った 俺達の攻撃をことごとく拾ってくる こうなるとダブルスは難しい 交互に打つという制約があるためどうしても自分のリズムを続けるのは難くなる とは言っても俺とユキオ2回ずつぐらい打ち込めば決まらないことはほばない しかしタカはそれをも返してくる

結局根負けした俺達はリズムを崩しだす なんでもない球をネットにかける、サーブが甘く入る、凡ミスの連続だ。そしてそれをタカが見逃すはずがない。散々に負けた俺達は最後の特訓を行った。自信を持つて思い切り振りぬくこと、また大切なことを学んだ。

最後はユキオとのシングルス。パートナーの手は知り尽くしている。初めてユキオと手合わせたのは2週間前。あの頃とは俺もユキオも違う。1セット目は俺、2セット目はデュースの末ユキオ、そして3セット目もデュースになりなんとか俺が取った。しかもお互いミスが少ない、いいゲームだ。週末は休息をとり月曜日は調整、火曜日の1回戦に望む。この日のプレイが出せれば1回戦は突破できる。自分達を信じよう。

つづく

第二話 チームメイト

第二話

先週の水曜日、18時半ごろオフィスの俺の電話が鳴った

「もしもしー あたし、カオリ 今練習してるんですけどお 何時に来れますか？」

どうやら試合に向けて練習をしているらしい 俺も出ることになっているがこの日練習に行くかどうか言っていないはずだ 行きたいとは思っているが仕事が多い 今日は遅くなりそうだ

「すいません、仕事まだ終わらないから分らないですよ 7時半か8時ぐらいにはいけるかもしれないけど」

「あつそ じゃあラケット持ってきてくれませんか？ ラケットが足りないのよ」

は？ 俺は仕事からだ カオリは遊んでるんじゃないのか？ オフィスから卓球会場まで徒歩5分 俺は仕事 中 ラケットは俺のラケットが足りないなら人が余っているだろ 勇気を振り絞って反論する

「それは無理ですよ まだ仕事終わってないし 僕のラケットなら貸せますけど誰か取りに来てくださいよ」

「それが無理なんです じゃあ誰かが帰るときに預けてくれる？ ガチャ」

は？ 無理？ どういう意味だ？ 俺のラケット結構手入れしてるんだが 誰かってだれかいるのか？ いた

「すみませんチ力さん　これ帰りがけに力オリさんたちに渡しておいていただけませんか」

「しょうがないわねえ　あんたたちの遊びに付き合ってられないけどいいわ　渡しとく」

「すみませんよろしくお願いします」

なぜ俺はこんなに腰を低くしないといけないのか　俺は今日は遊んでいない

趣味は卓球です　そう言えるようになるまで長い時間を要した　俺は中学校で卓球部だった　高校では卓球を辞め、陸上部に入った　卓球をやっているとモテないから　そんな理由だったような気がする　不思議なことに同じクラスには5人ほど元卓球部がいた　彼らも似たような理由で中学の部活のことは話したがらなかった　卓球部のフルウチ君も同じクラスだった　彼とは違う中学だが地区大会で一度対戦し、俺が勝っている　元卓球部5人組には、結局高校3年間彼女というものができなかった　卓球部のフルウチ君にも彼女はできなかった　どうやら部活とそれとは関係ないらしい　考えてもみる　キムタクが卓球部だったら？　モテるに決まっている

卓球をやっていてよかった　今は心からそう思う　来週行われる卓球大会　ダブルスの個人戦だが会社対抗の様相も呈している　これまでユキオというエースはいたがパートナーがいなかったため、ベスト8が最高だった　タ力はユキオではなく、力オリと組んでミックスダブルスで上位を狙う　半年前に転職で今の会社に入った俺がユキオと組む　全社の期待は大きい　大丈夫　趣味は卓球ですから

つづく

第三話 一回戦

とうとうこの日がやってきた 俺達の一回戦は明日だが今日の第一試合にはチームメイトのナミとマサヒコのペアが登場 これまで苦しい練習を乗り越えてきた仲間だ 試合前調整では俺がコートに入り練習相手を務める 二人とも動きがまだ硬いが俺のほう緊張しているようだ なんとか一回戦は突破してもらいたい 大丈夫 練習どおりやれば勝てる

出場チームは32チーム 32チームは16チーム毎に二つのブロックに振り分けられる この日試合のある16チームは男女のミックスダブルスカ男子ダブルスでも初心者为中心だ 通称ニコニコブロック 今回は女子ダブルスでエントリはなかったようだ 俺とユキオのペアが出場するブロックは卓球経験者为中心だ 昨年の覇者S総研もいる こちらは死のブロックと呼ばれる このように振り分けることで女性や初心者でも上位を目指すことができる 主催者側の配慮だ

1セット目 相手ペアはまだ球に慣れていない様子だ こちらは十分に練習を積んできた いける！ 強打を持っていないナミとマサヒコはきっちりつないで相手のミスを誘う 21-14で1セット先取

2セット目 相手ペアが調子を上げてきた 息を飲むラリーが続く ナミとマサヒコにとっては初めての公式戦だ 競り合いで精神面の弱さが出た マサヒコの苦手のバックを中心にミスが目立ちだす 19-21 惜しくもセットを落とす。

3セット目 ここからが勝負だ やはり相手はマサヒコのバックを

狙ってきた マサヒコも必死に食らいつく ナミもコースを狙って
攻める 頑張れ、頑張れ、信じるんだ ついに来た 20 - 18
マッチポイントだ しかし相手も粘る 連続2ポイント 20 - 2
0

20 - 22 二人はよく頑張った 競り合いで経験の無さが出てし
まったが次こそは勝利しよう ナイスゲーム 感動した ありがとう

つづく

第四話 死のブロック

第四話

大会二日目 今日俺達の一戦 十分に練習を積んできた充実感が不思議と気持ちを落ち着かせる 昨日危なげなく二回戦進出を決めたタカを相手に試合前の調整に入る サーブ、スマッシュの精度も高い いける

相手ペアがコートに入ってくる タカが抜け相手との試合前練習に入る 柔道など格闘技では組んだ瞬間相手の強さが分かるという卓球でも同じだ できる！ ここにいたかS総研 まさか一回戦であたると思わなかった だが、いずれはあたる相手だ

1セット目 相手の紫シャツのサーブにやられる 面白いように点を取られる ペアの禿げはたいしたことはない 作戦は決まった 紫シャツのサーブをいかに防ぎ、禿げに打たせるかだ そこを俺のバッククロスで攻める チャンスボールが来るはずだ しかし紫シャツは俺のバッククロスをカットで返してきた パートナーのユキオのスマッシュがネットにかかる カットボールを叩くのが得意なユキオでさえ攻めきれない 完全に相手のペースだ 15 - 21

2セット目 このままやられるわけには行かない 俺の七色のサーブも効いている レシーバーは禿げだ チャンスボールをユキオが叩く さすがの紫シャツも返すのがやっとだ そこを俺が決める 応援団も盛り上がってきた ここだ ここをモノにしなければ勝利はない 行くぞ！ ドライブサーブ、バッククロス、スマッシュ

俺達の攻撃が決まる 連続ポイントだ 21 - 18

3セット目 相手もフルセットにもつれることは想定外だったらしい 紫シャツのサーブがキレを増してきた こちらはコンビで勝負だ 禿げに打たせその次を叩く この作戦は的中 しかし紫シャツがサーブとレシーブの時はポイントを持っていかれる このレベルの選手が一回戦にいるとは 5 - 15 諦めるな！ 追い込まれたユキオのスマッシュが甘く入る ここは俺のクロスでカバーだ 応援団のボルテージも最高潮 皆の声援も耳に届いている 足も動く フォアもバックも振れている 禿げを狙え 紫シャツにチャンス ボールを与えるな 思い切り振り抜くんだ 自分を信じる パートナ―を信じる

18 - 21 セットカウント1 - 2 完敗だ ユキオが膝から崩れ落ちた 俺も顔を上げられない その時、この日最大級の拍手が巻き起こった そうだ 胸を張ろう 俺達は最高のプレイをした

こうして俺達の挑戦は終わった サーブとサーブレシーブ ここで圧倒的な差が出た コンビプレイで善戦はしたが一歩及ばなかった ここから新しい挑戦が始まる 俺はラバーの張替え ユキオはラケットを新調 一人一人の力は紫シャツには及ばなくてもコンビプレイで付け入る隙は必ずあるはずだ サーブとサーブレシーブだ 二度は負けられない

つづく

第五話 スポーツマンシップ

俺達が敗れた翌日はニコニコブロックと死のブロック合わせて2回戦が8試合行われた。今年はレベルが高い。昨年準優勝のタカと力オリのペアもニコニコブロック2回戦で敗退した。俺はこの日、出張で外出し、試合を観戦することができなかった。出張から戻った俺はセンターホールに貼られたトーナメント表を見て目を疑った。王者S総研が敗れているではないか！この日審判に回ったパートナーのユキオに聞くと、例の紫シャツは出ていなかったらしい。出張が何かで出られなかったのだろう。オフィスビル内のトーナメント仕事の都合も実力のうちだ。代役の力が足りなければ容赦なく敗れることになる。

大会は大詰めを向かえ、今日は準々決勝と準決勝だ。俺はまたしても目を疑った。シャツは青だが、例の男が出ているではないか！同じ会社の別ペアの代役で出ているらしい。こっちはニコニコブロックだぞ！決勝ではニコニコブロックの覇者と死のブロックの覇者があたる。結果として決勝は消化試合的なものになる。つまりニコニコブロックの出場ペアにとって決勝進出は優勝に等しいのだ。

そのことを知ってか知らずか、シャツのペアは圧倒的な強さで準々決勝を突破。続く準決勝でも第1セットを取り、2セット目も大幅リード。相手のGパン女性のペアは違うチームだが、同じ場所で練習を重ねた仲間でもある。俺達は決勝で会おうと誓い合った。俺達は実力でシャツの前に敗れ去った。しかしこっちはどうだ。連夜の練習の成果を発揮し、ニコニコブロックで決勝進出を目前にしたGパンペアがいいようにもいたぶられている。こんなことがあっていいのか。俺は大会本部に詰め寄った。今年のレベルの高さは異常らしい。両ブロックとも真剣勝負が続く。卓球協会公認の試合は背中

に名前入りのゼッケンをつけることになっている。オフィスビルでの交流戦ではそこまで厳格にはしない。その結果、同じ会社で代役を出したりして、なあなあな運営でも楽しみながらトーナメントは進む。だがそれは昨年までの話だ。

結局大差で敗れたGパン女性がトーナメント表を見つめる。悔しさがにじみ出ている。俺は声をかけることができなかった。観客席から「お疲れ様」と声がかかる。Gパン女性が応えた。「ぼろ負けだよ。足が動かなかった」彼女も全力を尽くしたスポーツマンなのだ。俺は目頭が熱くなった。

翌日、俺はまたしても目を疑った。今日の決勝にシャツが出ていないではないか！代役はこう言っちゃ悪いがハナクソレベル。まともによってあればニコニコブロックでも一回戦突破がいいところだろう。シャツはまた出張か？いや、違う。コートサイドで見物していやがる。シャツが出ていても批判は免れないが、決勝にハナクソを送り込むとは選手、事務局、観客全てに対する冒瀆だ。対するネクタイペアは死のブロックを勝ち上がった実力者だ。あっけなく試合は進む。

隣のBコートでは3位決定戦が行われている。シャツに敗れたGパンペア、ネクタイに敗れたポロシャツペアが熱戦を繰り広げる。彼らはチームメイト同士でもある。手の内を知り尽くしたもの同士、銅メダルをかけて真剣勝負が続く。どちらが決勝か分らない好ゲームだ。3決の1セット目が終わるころ、あっさりと優勝が決まった。決勝に進むに値しない選手を送り込んだS総研。そして大会を壊した張本人であるシャツ。見物しているシャツが立ち去る時、俺とユキオは誓い合った。奴は必ず叩きのめす。

第二部 ひよこたまごカップ編

第六話 ラケットとラバー

あの日シャツに敗れた俺達。パートナーのユキオは言った。「ラケットを言い訳にはしない」 相手のほうがよいラケットを持っているから負けたんじゃない。実はユキオのラケットは1000円ショップで買ったものだ。とにかくひどい。スリッパにゴムを貼って打ったらこんな感じだろうか。そしてユキオはラケットを新調した。このラケットで次は勝つ 決意の現れだ。

6000円で新調したラケットを持ったユキオは強い。磨きをかけた俺の七色のサーブ、バッククロスでさえ自分の球として打ち返してくる。そして必殺のスマッシュ。死角は見当たらない。これと対等に渡り合うにはあれしかない。噛み付くようなドライブ。もっと強いスピンの必要だ。もっと強いスピンの必要だ。

そして俺は代官山へ向かった。卓球の聖地「International Table Tennis」 俺のラケットはラバーと合わせて5000円はしたはずだが、15年前のものだ。ラバーは固くなり光沢を失っている。ラバーを新調すればスピード、スピン、コントロールの全てがよみができる。さすがは専門店。豊富すぎる品揃えだ。しかし店員の対応は恐ろしいまでに悪い。完全な殿様商売だ。ユキオから注意されてはいたがこれほどとは。その中でひとときわ目を引く新製品「ブライス2」 アテネオリンピックチャンピオンモデルを更に進化させた最高峰モデルだ。これだ。

「値引きして5030円 定価は6300円だよ」店長らしき男が言った。さすが最高峰モデル ラバーだけで5000円はきつい。

それを戻そうとする俺の背後で別の店員が店長にささやく「きついらしいですよ」手に持った高級ラバーを叩きつける衝動にかられる。昔ドラマでヤクザ風の男が高級ブティックで足元を見られドレスを破り捨て、20万円を叩きつけて店を出るシーンが頭をよぎった。なんという店だ。

いかんいかん落ち着け。チャンピオンモデルを買うことはない。最高のプレイをする。そのためにここに来たんじゃあないか。「スレイバーG2」俺はこれを選んだ。3500円とラバーの中では高い方だが、世界を席巻したあのスタンダードラバー「スレイバー」の第二世代モデルだ。スピードとスピニングが手に入る。噛み付くドライブが手に入る。あとは思い切り振り抜く勇気だけだ。初練習は明日だ。

つづく

第七話

卓球のラバー（ラケットに張るゴム）は驚くほどデリケートだ。特に俺のスレイバーG2のようにスピンを追求したラバーには保護シートを貼らなければならない。G2の初練習のその日、俺は保護シートをはがした。求めていた輝きがそこにある。

1週間後に迫ったひよこたまごカップ。それは1チーム4人の団体戦で行われる。通常の卓球の団体戦は1チーム7人の3シングルス2ダブルスだが、ひよこたまごカップは2シングルス1ダブルス。このうち二つをとれば勝ちだ。またチーム内に2人以上は女性という特別ルールが設けられている。

俺は1stシングルス。エースのユキオは今回はナミとペアを組む。俺達がシャツに敗れた大会のニコニコブロックで屈指の好ゲームを演じたペアのナミだ。ここ2ヶ月のナミの進歩は目覚ましい。カットと強打を覚えてきた。ユキオとのコンビも様になってきている。最後の2ndシングルスは幹事役のトモコ。トモコはいいセンスを持つてはいるが全く練習をしていない。正直勝ち望めないだろう。つまり俺のシングルスとユキオ・ナミのダブルスを取らなければ俺達に勝ちはない。面白いじゃあないか。

この日から俺はユキオを相手にシングルスの打ち込みを行った。俺の七色のサーブはシングルスにこそ真価を発揮する。サーブレシーブの得意なユキオが相手だけにサーブイエースこそとれないが帰ってくるコースは限定される。この3球目だ。もっと強いスピン、噛み付くようなドライブだ。まだ100%ではないが精度は上がってきた。3球目は決める球ではない。5球目で決めるチャンスボールを呼び込む球だ。5球目でクロスに低く速いドライブスマッシュ。

勝ちパターンは決まった
あとは練習に裏づけされた自信と思い切
り振り抜く勇氣だけだ

つづく

第八話 一回戦

朝8時半、俺達は開場前の体育館に集まった。既にライバル達も集まってきた。中学生を除くと平均年齢は50を越える。ひよこたまごカップ。俺達はたまごランク2に挑む。最高峰のひよこランクには初参加の俺達は出られない。下から二番目のたまごランク2でも決してレベルは低くない。相手にとって不足なし。さあ行こう。

試合前のチーム練習を終え開会式に臨む。衆議院議員や市議会議員の挨拶もありかなり本格的だ。大会役員の挨拶は長い。「短めに」と言う人ほど長いのはご愛敬だ。次に表れたのはスーパードーマン。彼女の指示に従い準備体操を行う。驚くほど元気だ。彼女の元気の源を解明できれば地上のエネルギー問題は一気に解決するのではあるまいか。議員達による始球式で開会式は終了。いよいよ第一試合。相手はチームW。俺の第一シングルスからだ。

「あ、あ、あ、一人交通渋滞でまだ来ないんですよ」
「へっ？」

あっさりと俺の不戦勝は決まった。最初の試合で緊張していた俺は正直ほっとした。しかしこれは団体戦だ。次の第二ダブルスか第三シングルスをとらなければ勝ちはない。

第二ダブルスはユキオとナミのペアが登場。正直ナミのレベルでは厳しい相手だ。俺とユキオが組めば恐らく問題ないであろう。だが俺達はチームで勝つことを選んだ。しかし現実には甘くなかった。やはりナミが狙われる。相手のダブルスは息がぴったりあっている。ナミのサーブにクレームをつけてくる。ユキオにとっても苦しい展開だ。ユキオはナミが打ちやすい球が帰ってくるように力を抜いて

サーブを打つ それは相手にとっても打ちやすいことを意味する
自分が決めなければというプレッシャーとの戦いにユキオは敗れた
これで1-1のタイだ 勝負は次の第三シングルスに委ねられる

次は全く練習していなかったトモコ、第三シングルスは試合前から
決まったかのように見えた しかしトモコは奇策を持ち出した 助
っ人ミツキー ミツキーはフットワークに若干の不安があるものの
抜群のスピンを持っている ミスをしたときに「きゃっ」とかわい
い声を出す、年齢は平均以上のはずだ そしてミツキーは攻めた
互いに1セットずつとって勝負の第三セット やはりいきなり助
っ人は負担が大きかったのか疲労の色が見える サーブが外れ、甘
くなつたところを叩かれる 結局一回戦は俺達の完敗で終わった

たまごカップランク2は6チームの総当たり戦だ 勝負はこれから
だ

つづく

第九話 冷や汗

二回戦 相手はむっちゃんズ 俺達はこちらでも奇策を弄した 第一シングルスはミッキー 通常卓球の団体戦ではシングルスのエースを第一シングルスに起用する ここは敢えてミッキーを投入し、ダブルスと俺のシングルスを取る ミッキーのシングルスも捨て試合という訳ではない ここでも相手のトシ子を相手に好ゲームを展開する ミッキーとトシ子、二人合わせて年齢は120を下るまい 30年後俺はあのように動けるのか？ デュースの末、3セット目を落としたミッキーは肩を落とす ナイスゲーム！ 後は俺達にまかせろ

続く第二ダブルス ユキオとナミのペアが出場したが、ここでも苦戦 相手はここにエースを投入してきたようだ 相手ペアの力ささとシングルスであたったら俺やユキオでも危ない 二人は善戦及ばずセットカウント0-2で敗れた

既に勝敗はついた 初心者交流を主な目的とするひよこランク2とランク3は勝敗がついても第三シングルまで行うことになっている 俺にとって二回目の公式戦 初のシングルの試合だ 最初から全力で飛ばす 悪い流れを断ち切るんだ 七色のサーブが決まる アンダー、トップ、サイド、そしてゼロスピン サービスエースこそ少ないがチャンスボールを叩く 思い切り振りぬけば決まる 11-1、11-2 相手が3番手級だったこともあり俺は圧倒的なスコアで勝利した

スコアとは裏腹に俺は冷や汗をびっしょりかいていた 本当に自分のプレイができていたのか？ たまたま入っただけではないか？ 試合中の記憶はほとんどない これほど緊張するとは 不安を

残したまま3回戦に臨むことになった

三回戦の相手は西中学 といっても中学生ではない 卓球部の顧問が4人もいるはずないから恐らく保護者会のお母様方であろう 揃いのユニホームに身を包み、息もぴったりだ

第一シングルスは俺 先の圧勝の不安をひきずったままだ 相手のミホコさんが大きく見える ミホコさんはサーブレシーブが上手い 俺のサーブに手を焼いてはいるが低く返してくる この3球目だ あの日練習のように振り抜けばドライブが噛み付く しかしこの振れてない腕ではネットにかけるだけだ 1セット目は後半調子を戻したがとき既に遅く8-11 2セット目は1セット目後半の勢いにのり前半リードするも最後はデュースになり13-11 1点マツチは流れが大事だ 一旦流れが向こうに行くとそのセットは一気に苦しくなる 3セット目俺は流れを戻せずにミホコさんに敗れた もう後がない

この危機を救ったのはナミとミッキーだった ナミはユキオに全幅の信頼を寄せている 今度はユキオがナミを信じる番だ まだ動きの固いユキオに対し、ナミはリズムに乗ってきた これまでの二試合でナミは打点の低いサーブにクレームをつけられてきた そこをキッチリ習性し、決めてきた こうなるとユキオは強い これまで鳴りをひそめていた必殺のスマッシュが当たりだす ナミもよく振れている 俺は主審を務めながらガッツポーズをこらえる ユキオとナミのペアは2-0で初勝利を上げた

続いて第三シングルスのミッキー 相手の克さんは若いが経験はミッキーが上だ トップとアンダーのスピンスラブを打ち分けるミッキー 得意でないバックの強打も入りだした 克さんもいいプレイをしている ミッキーの「きゃっ」は顕在だが勝負どころでは決め

る 二人とも時間を追うことにプレイの切れが増してくる ドライブで流れをつかもうとする克さんに対し、冷静につないでいくミッキー 実力が拮抗してくるとミスが少ない方が勝つ 卓球の鉄則だ
こちらにも接戦の末、2 - 1でミッキーが勝利を収めた

試合後、俺は隣のコートの試合を見つめていた 残り2試合 その2試合で対戦するチーム同士がしのぎを削っている 第一シングルスだ この両者と俺は対戦することになる 今の俺では勝てない ナミとミッキーのプレイを思い出せ 今の俺に足りないのは自信だ あの日の特訓をイメージしよう あの日の俺は集中力の頂点にあった あの日、俺のゼロスピンは4速を超えていた 今日の俺はせいぜい2速だろう 殻を破れ 多くの場合、勇気と自信は対になる 思い切り振り抜く勇気 それさえあれば勝てる 自信もついてくる 静かに気力がみなぎってくるのを感じ始めていた

つづく

第十話 実力

第十話 実力

「ユキオさん、1シン行きますか？」

「うーん、あと一回ナミちゃんと打たせてくれよ」

俺はユキオがそう答えるのは分かっていた。俺に1シンで勝たせたい、ナミとのダブルスで勝ちたい、そう思っているのが分かっていた。

「分かってるな。早く決めるんだ。だが0-2で負けとかはナシだ。だつたら長引いたほうがマシだ」

「っす」

今日、ユキオはダブルヘッダーになってしまった。16:30から武道館で試合があるためここには14:30までしかいられない。現在13:55。あと2試合残っているがこの試合までだ。無類のプロレス好きであるユキオは半年も前から武道館の最前列チケットを確保していた。そんな日にひよこたまごカップが重なってしまうとは。最後までここにはいられない。でもギリギリまでここに残ることを決めたユキオ。恐らく試合前の名物のパフォーマンスには間に合わないだろう。それでも残ることを決めたユキオの気持ちに因應るためにも1シンは俺がとる。

相手はチームツイنزのヒロシ。さつき観戦した変則球のプレイヤーだ。何か違う。サウスポーだ！ここに来て気付くとは。まだ緊張が抜けていないらしい。しかし試合前に分かってよかった。15年前俺にはどうしても勝てない相手がいた。サウスポーの金子。奴

は強かった。そしてヒロシの変則サーブ。これが返せない。あの日のシャツのサーブを思い出す。こいつらに二度負けるわけには行かない。俺は七色のサーブで攻めた。アンダーとゼロスピン。変則ブレイには正攻法で攻める。ゼロスピンも3速まで上がってきた。アンダーはエースを取りにくいサーブだ。これを普通のカットで返す。と上に浮いてくる。このカットのかかったチャンスボールを叩くのが俺のパターンだが、今日の俺はことごとくネットにかけていた。しかしヒロシを相手に俺は敢えてアンダーで攻め続けた。3球目のバッククロス。サウスポーのヒロシにとってはフォアになるが関係ない。思い切り振りぬいた俺のバッククロス。それを返せるのはユキオしかない。

ヒロシのサウスポーから繰り出されるフォアにはサイドの変則スピんがかかってくる。スピンの回転はそう強くはないが奇妙な横揺れで迫ってくる。11点先取の3セットマッチ。サーブは2本交代だ。互いに2点ずつ取りながらゲームは進んでいく。終盤に來ると自分のサーブは落とせないというプレッシャーがお互いののしかってくる。結局1セット目は僅差でヒロシに取られた。しかし俺は確かな手応えをつかんでいた。

2セット目。この日5試合目のヒロシに疲労の色が見えてきた。ツインズのエースとして5試合連続で1シンの重圧もあったことだろう。俺はこれまでにいい所がなかったが脚はよく動いている。相手の急所を突くのは勝負事の鉄則だ。左右に球を振り変則球のヒロシを揺さぶる。これが功を奏し、リードを広げる。変則球はやはり難しいがペースはこっちにある。ここを攻めるんだ。10-10。ここからデュースに入る。サーブは1本交代だ。相手サーブを如何にブレイクするかがポイントだ。互いに1回ずつ相手サーブをブレイクして12-12。ここからの俺は集中力が違った。アンダーとバッククロスでキープし13-12。ヒロシの変則サーブをキツチリバ

ツク側に返す 我慢比べだ 来た チャンスボール！ 噛め！ ドライブが決まり浮いた球をフォアにクロスで叩き込む よし！ 3 セット目だ

「ゲームカウント2 - 1。試合終了」
「へっ？」

始めは審判側のミスだと思った しかし記録をみると9 - 11、11 - 8、14 - 12 確かに俺が2ゲーム取っている 極度の緊張と集中力が相まって2セット目の記憶が抜け落ちていたらしい どんな形でも勝ち星は勝ちだ ヒロシとの死闘を乗り越え、俺は自信を取り戻していた

ツインズのダブルスはヨネコとヒサコ ヨネコはこのブロックで恐らく最高齢でシューズは小学校の上履きである ダブルスはペアが交互に打つというルールがあるためフットワークが重要だ 高齢で上履きのヨネコはダブルスに不向きと思われたが、実に無駄のない動きだ 更にヒサコがヨネコの3倍は動き全てのコースをカバーする ここをユキオとナミは攻められるか？

1シンが長引き武道館遅刻が決定的となったユキオは、この日一番の集中力を見せた ナミに対する信頼感が芽生え、早い段階から打って出ている これが決まらなくてもナミが確実につないでくる そこに必殺のスマッシュが決まる つなぐ相手には早く決める 言うほど易しくはないプレイだが調子を上げてきたユキオは面白いほど決めていった ゲームカウント2 - 0

3シンはミッキーとツインズのミナコ 初心者ミナコをミッキーは容赦なく攻め、ゲームをものにした 3 - 0 完全勝利だ

う
う
く

第十一話 チーム

最終戦 第一シングルス 相手は長身のアキラ 先の試合で変速球のヒロシを破った実力者だ 俺の作戦は決まった ディフェンスから 打ち気にはやるアキラに対し一歩ひいて構える ユキオのスマッシュを散々に受けてきた俺に死角はない 焦りの見えたアキラのボールはネットにかかる ゲームカウント2-0 控えていたナミから声がかかる 「この試合が一番楽しそうでしたよ」 ありがとう 君たちのおかげだ

第二ダブルス もうユキオはいない 代役はマサヒコ ナミとマサヒコ、本来のペアに戻った ナミはこれまで俺の予備のシェイクハンドをペン持ちで無理に使っていた マサヒコはシェイクハンドのプレイヤーだ ナミはシェイクをマサヒコに渡し、試合の終わった俺のスレイバーG2を手を取った 大丈夫 思い切りやればいい 二人は実に伸びやかなプレイをした 実力差のある相手に臆することなく正面から向かっていった 敗れはしたが次につながる試合だった ナイスゲーム

勝負はまたしても第三シングルスのみッキーに委ねられた 試合はもつれたが経験に裏打ちされたみっきーのプレイは揺るがなかった 2セット目はデユースで落としたが、3セット目はみっきーが取った ゲームカウント2-1 さあ整列だ 胸を張ろう 「ありがとうございました」

最終戦の結果を大会本部に報告に行ったトモコが息を切らして走ってきた トモコは大会中、ずっと裏方に徹してくれた 最後までプレイできたのはトモコのおかげでもある

「2位だよっ！」

「へっ？」

俺は耳を疑った 掲示板に駆け寄った 間違いない 俺達が2番目にランクしている 6チームでの総当り 1位は4勝1敗でチームW 渋滞による遅刻で俺が不戦勝したチームだ そして3勝2敗で4チームが並んだ 得失点差で俺達は2位になっていた 俺とミッキーのシングルスでいくつか大差でとっていたこと、負けた試合のほとんどがフルセットにもつれる好ゲームだったことが効いたのだろう たまごランク2でリーグ2位になった俺達は、来年はランク1に出られるかもしれない

だが俺達はそれよりも大切なものを手に入れた 俺達は本当のチームになった ひよこたまごカップの趣旨は、初級者に真剣勝負の機会を与えること 全力を尽くした俺達は多くのことを学んだ 自信を持つこと、勇気を出して思い切り振り抜くこと、そして仲間を信頼すること 表彰式を終えたミッキーに声がかかる ベテランの彼女は顔が広い

「ミキちゃんよかったじゃない 若い男の子とできて うらやましいわあ」

「しかも二人ともイケメンで よだれが出ちゃう」

かつてマダムキラーで名を馳せたマサヒコもこれには参っているようだ

帰り際、俺は第二体育室で足を止めた 最高ランクであるひよこカップの熱戦が続いている ここには初心者はいない だが何か物足りない 俺達のホームである卓球道場 そのアイドルの愛ちゃん 天才小学生プレイヤーだ そしてコーチの趙さん 二人のプレイを見ている俺の目は知らずと肥えていたようだ 俺達の挑戦はつづく

第三部 卓球道場編

第十二話 草試合

中山卓球道場。俺達のホームコートだ。とは言っても新参者の俺達は完全にアウエーの雰囲気練習する。そして中山の愛ちゃん。道場のアイドル、天才小学生プレイヤーだ。小学生の頃の福原愛選手よりも実力は上と見る声も高い。一時間400円の道場でのプレイ料金も彼女だけは免除されている。無理もない。彼女は毎日6時間以上練習するのだ。

俺達が道場に通いつめるようになったのは九月からだ。顔馴染みも増えてきた。

「兄さん達、日曜の試合はどうするね？」

道場では毎月第三日曜に草試合を行っている。出てみたいとは思っていたが俺達のレベルではまだ早いのではないかな？腕をあげてきたとはいえ俺達は所詮エンジョイ卓球のレベルだ。愛ちゃんを初め道場に集まる選手達とはレベルが違う。道場で卓球ユニホームを来ていないのは俺達ぐらいなものだ。躊躇する俺達に馴染みの徳さんは言った。

「大丈夫だって。兄さん達うまいからなんとかなるさよ。なんなら今からひとつやろうじゃないか。」

隣でサーブ練習をしていたミドリさんを入れて急遽ダブルスが始まることとなった。ユキオとペアを組むのはあの日シャツに負けて以来だ。ナミとマサヒコが下がり、徳さんとミドリさんが入る。二人

は正規のペアではない。

徳さんが卓球を始めたのは恐らく50を過ぎてからのことだろう。素振り等基本がなっていないところが見受けられる。しかし圧倒的な練習量でそれをカバーしている。ペアを組むミドリさんは対照的に腰を落としてしっかりと振ってくる。付け入る隙があるとすれば急造ペアのコンビプレイだ。俺とユキオは徹底して徳さんのフォアを狙った。徳さんの強打をカウンターで返す。リスクの高い組み立てだがミドリさんを封じるにはこれしかない。1セット目は落としたが後半から作戦が当たりだした。カウンターが決まりミドリさんのバックが浮いたところを叩く。俺達のコンビは完璧だった。対する相手のコンビはほころびはじめる。一度乱れたコンビは簡単には戻らない。俺達は勢いに乗り三セット目もものにした。

「ありがとうございます」

「やっぱりやるねえ兄さん達 日曜は負けねえべよ」

これで後には引けなくなった。エントリー用紙を出して帰ろうとした俺達はミドリさんのサーブ練習に目を奪われた。そのサーブは先ほどのゲームでは見せていない。鋭さを増したサーブが連続で決まる。どうやら彼女にも火をつけてしまったようだ。

つづく

第十三話 メンタル

第十三話 メンタル

日曜の11時半、俺とユキオは道場近くの定食屋で待ち合わせた。早めの昼食をとり、作戦会議だ。俺もユキオもペンホルダーの攻撃型だがユキオは表ソフト、俺は裏ソフトのラバーを使う。表にイボイボが出ているのが表ソフト、スピンはかかりにくいが徹底的にスピードを追求したラバーだ。俺のスレイバーG2は裏ソフトのスタンダードモデル「スレイバー」の後継モデル。スピードを保ちつつスピン、コントロールを高めたバランスの取れた攻撃を可能にする俺が攻めながらつなぎユキオが決める。この流れに如何に乗れるかだ。やはりサーブレシーブが鍵を握るだろう。

12時過ぎに道場に着いた。試合は1時からだが既に他のメンバーは練習を始めている。出場は8ペア。4ペアずつのブロックに分かれて総当たりのリーグ戦を行い、各ブロック上位二チームが決勝トーナメントに進む。初出場の俺達はBブロック。徳さん、ミドリさんと道場の管理人の山下さんが同じブロックだ。この前のリベンジを狙う徳さんが山下さんに頼んで仕組んだのだろう。これは公式戦ではなく道場の草試合。このような仕組みがあってもいい。面白いじゃないか。

一回戦は山下さん。いつも事務室にいる彼が打っているところを見るのはこれが始めてだ。ペアを組むのは息子のタケル君。父親の言うことはあまり聞いていないが現役卓球部員はやはり強い。県大会レベルぐらいだろう。高校でも続けて欲しいものだ。攻撃型のタケル君にカットマン山下さん。山下さんは台から二歩離れて構え、俺達の攻撃をことごとく拾ってくる。こちらが守りに入るとタケル

君に打ち込まれる　小細工は通用しない

実力の差を感じとった俺達は次の試合に狙いを絞った　二勝すれば決勝トーナメントに進めるはずだ　サーブとサーブレシーブは思い切って隅を狙う　早い段階からドライブで切り返して攻める　開き直った俺達に対し、焦りの色が見えるタケル君のスマッシュがネットにかかりだす　実力ほど点差はつかない　1セット目はストレートで敗れたがいい流れを掴んだ

2セット目、俺達は奇策を持ち出した　俺もユキオも台から離れる超守備型シフト　敢えてタケル君にチャンスボールを上げる　カットマンの山下さんも攻めに転じてきたが、必死の守りで耐えていると狙い通り、タケル君のミスが目立ち始めた　卓球はメンタルが支配する　強いとはいえ彼はまだ中学生だ　このセットは僅差で俺達が取った

最終セットを前にタケル君が山下さんにこっそりとしぼられている　彼はこのセット修正してくるだろう　第1セットの攻めと第2セットの守り、これが噛み合えば勝てる　微妙に立ち位置を変える　俺はタケル君の強打を拾い、ユキオはカウンターを狙う　タケル君も調子を取り戻し、山下さんの安定したプレイは顕在だ　もともと実力は向こうが上　俺達は思い切り向かっていった　18 - 20　相手のマツチポイントだがデュースに持ち込めばチャンスはある　ここで山下さんは奥の手を出した　高速サーブが手元で急激に曲がる　俺のラケットが空を切った　サービスエース

実力者の山下さんは最後まで本気のサーブを隠していた　一番の勝負所で決めてきたメンタルの強さ　タケル君はもつと強くなるだろう　だが俺達も実力以上のプレイができた　この試合でのプレイをものにする　俺達も強くなる

う
う
う
う

第十四話 本気

二回戦はミドリさんペア 先の練習試合では徳さんにいきなり駆り出され戸惑っていたところもあったが、今日は正規のカナエさんがペアだ 二人とも常連でシェイクハンドのオールラウンドプレイヤー フォアからの鋭いドライブとスナップをきかせたバックハンドに注意が必要だ 今回のミドリさんは最初から全開のようだ サーブはあの日の練習よりも更にキレを増して来ている 同じサーブを二度ミスしてはならない 卓球の鉄則だがミドリさんは同じフォームから異なるスピンを繰り出し的を絞らせない 面白い 俺も七色のサーブで対抗する やはり鍵はサーブレシーブだ

1セット目はお互いサーブをキープしながら我慢比べとなった 後半になると重圧が変わってくる そこで痛恨のサーブミス 練習量の差が出た形になってしまった この流れでは勝てない 攻めるんだ 俺達の持ち味は思い切りのよい攻めにある それを出さずに負けるわけには行かない 俺はサーブをゼロスピんに絞り センターラインぎりぎりの相手のバックを狙う 懐深く差し込めばバックハンドを封じられる ストレートのゼロスピンはオーバーするリスクが大きい 序盤はサーブミスと無理な攻めが重なりリードを許すが、攻め続けた俺達は中盤から流れを引き寄せた 連続ポイントで逆転すると一気に押しきった

三セット目も俺達は攻めた このまま押し切りたいところだが俺達のパターンは読まれてしまっている ミドリさんのバックハンドをカウンターで返すところに必ずカナエさんが待っている クロスカウンターだ 俺達がコンビプレイでリードされてしまうとは 相手につけている隙はない ならば正面から攻めるのみ 一旦断ち切られた流れをなんとかたぐり寄せる 俺達の実力をとくに超えた領域

での勝負となった 俺もユキオもこれまでにないスーパープレイの連続 だが勝負所で俺のクロスがオーバーする ネットではなくオーバー 思い切り攻めた結果だが僅差でこのセットを落とすこととなった

「ありがとうございます」

ミドリさんが握手を求めてきた 額に汗が光る 彼女の本気のプレイに俺達がここまで食らいつくとは思っていなかったようだ 彼女達は既に山下さんペア、徳さんペアに敗れ決勝進出はなくなっているが俺達との試合に満足してくれたようだ 俺達にはまだチャンスがある

つづく

第十五話 成長

次は最終戦だ 相手は徳さんと富さんのペア 既に俺達は二敗 山下さんペアが三連勝で1位通過を決めた 徳さんペアは1勝1敗 ミドリさんペアに勝って来ている だが山下さんペアからセットをとったのは俺達だけだ タケル君が調子を上げる前に奇策で上げたセットとはいえここで効いてきた 徳さん達に勝てば得失セットで二位になる

無欲で行こう ユキオが言った 目の前のポイントに集中する 思い切り悔いのない試合をしよう

徳さんはペンの攻撃型 本来のパートナーである富さんはシェイクハンドのカットマン 山下さんペアと同じ組み合わせだがタケル君のように揺さぶりは通用しないだろう ならば自分達のプレイをするだけだ 先の二試合では開き直って実力以上のものを出してきた 勝ちはずしかったが二試合で確実に成長している 上級者との実戦は普段の練習では得られないものをもたらす 思い切り隅を狙うゼロスピンは既にものになった 相手の強打を強打で返すユキオのカウンターは新しい切札になりつつある 徳さんたちに勝てるとすれば試合中の成長だ 二試合前の俺達とは違う

サーブは俺から 腕を高く上げ一気に振り下ろした 手元でスナツプを利かせる 今まではアウトになっていたサーブだネットを越えて急激に曲がる 徳さんのレシーブは高く浮き上がった そこには既にユキオが回りこんでいる 狙いすましたスマッシュが決まる

「ひゅー。腕を上げたね兄さん達」

富さんも俺達の攻撃をカットで拾ってくる 山下さんのカットを攻めた俺達はここでも攻めた 狙いは徳さんのバック攻め続けられどここにチャンスが見い出される 富さんのサーブは鋭いカットだが徳さんのバックを狙う ここで俺のクロス 富さんの体が流れ甘く入ってきたところをユキオが叩く 俺達の勝ちパターンだ 対する徳さんはフットワークを使って攻めてくる フットワークだけじゃない ポジションどりだ 経験に裏打ちされた読みと抜群のフットワーク やはり強い

熱戦も三試合目だ 俺達の集中力は途切れない スコアは16-18 サーブは俺 大事なポイントだ サーブが決まり三球目をユキオが叩く フォアで待っていた徳さんのカウンター その瞬間俺は横に跳んでいた 思い切りふりぬいた ダダダンッ 俺が床にたおれこむよりも早く、ボールは相手ペアの間を駆け抜けていた

「ナイスボール」

ユキオが差しのべた手をきつく握りかえす 勝負どこで見せた俺のサーブプレイをきっかけに俺達は流れを引き寄せた ハイレベルの実戦のみで得られる最高のパフォーマンス ユキオも俺も信じられないプレイを連発した 外す気がしない セットカウント2対0 ストレートで初勝利だ 試合順にも恵まれた 先の二試合がなければこの勝ちはなかったであろう よきライバルの徳さん富さんと再戦を誓う

「ありがとうございました」

「いやーまいっただよ。あんだけまぐれを出されちゃあ」

徳さんの負け惜しみは真実だ 肝心なところで見せたまぐれあたりこれをものにするにはもっともっと練習が必要だ 俺達はBブロ

ツク二位で決勝トーナメント進出を決めた

つづく

第十六話 趣味は卓球です。

二位でBブロックを通過した俺達 準決勝はAブロック1位の愛ちゃん 天才小学生だ パートナーはコーチの趙さん 趙さんはかつて乱視のため中国代表候補から外された経験を持つ これほどの相手と試合するのは後にも先にもないだろう とにかく思い切りよく全力でぶつかるのみだ

だが現実とは違った 趙さんは明らかに手加減をしている 野球の強打者は得意なコースのすぐ隣に苦手なコースがあるという それが俺達にもあったとは フットワークで得意な場所に变えようとするが趙さんの球は常にその先をゆく 俺達はネットの山を築いた 届かないパットは入らない タイガーウッズの教えるところだ ネットにかかる球は入らない

趙さんに完全に封じられた俺達は愛ちゃんの實力を見るまでもなくストレートで敗れた 相手の強打はほとんどない 完全な自滅だ 徳さんとミドリさんがなぐさめてくれた 趙さんと初めて対戦するものは皆、洗礼を受けるらしい 決勝でも山下さんとタケル君はストレートで敗れた 俺達ほどではないがタケル君が封じられた 山下さんはよく粘ったがレベルが違っていた

相手にいかに力をださせないか 趙さんはそれを知り尽しているようだった 愛ちゃんと趙さん 愛ちゃんの公式戦と重なった場合を除き道場での草試合に欠かさず出ているという そして未だ無敗道場に集まる多様なプレイヤーとの試合が愛ちゃんの経験値を高めて行くのだらう 俺達との試合も無駄ではないのかもしれない

三ヶ月後、俺は東京体育館に来ていた 全日本ジュニア、愛ちゃんの公式戦だ 18歳以下の日本一を決めるこの大会は大学1年生までが出場する 小学4年生で最年少の愛ちゃんは高校生相手にベスト8まで勝ち進んだ 準準決勝の相手は小学6年生の聖ちゃん 天才同士の熱戦はフルセットの末、聖ちゃんが勝った 二人はこれから日本の女子ダブルスを背負っていくだろう 愛ちゃんの両親がスタンドで泣いている ベスト4に入れば全卓連の強化指定になれた そうだ 当の愛ちゃんとコーチの趙さんは驚くほど淡々としている 悔しくないはずがない 来年があるさということでもない 既に明日からの練習に照準を合わせているのだろう

思えば俺が卓球を再開したのはオフィスビル対抗戦からだった あの日の草試合以来、第三日曜は草試合に出ている あれ以来決勝トーナメントはないが、俺もユキオも確実に成長している 愛ちゃんとの対戦もあれ以来ないが全日本級のプレイヤーとの対戦はから多くのものを得た

卓球をやっていてよかった 改めてそう思う 温泉卓球もいいだろう 今年のオフィスビル対抗で俺達は優勝候補だ シャツに勝つとしたら俺達だろう 俺達のレベルは決して高くはない 卓球に全力を尽くすこと そこから多くのことを学ぶ 自信、勇気、信頼、そしてスポーツマンシップ 勝ち負けだけが卓球ではない だが勝ちを目指さない卓球に価値は少ない 俺達は胸を張って言う 趣味は卓球です

完

あとがき

「趣味は卓球です。」はブログから始まったものです。「オフィスビル対抗」や「ひよこたまごカップ」は実在する大会をモデルにしています。登場人物の多くは実在する人をモデルにしています。勝手に登場させられた人ごめんなさい

第三部の「卓球道場編」から本当の意味でのフィクションに挑戦してみました。毎日更新することを目標にしていたので後半は大変でした。話が雑になってしまった感はありません。本当は愛ちゃんの全日本ジュニアでの活躍やユキオの高校の卓球部のOB会など書いてみたいエピソードはあったのですが、このペースで毎日更新は無理なのでここで一度打ち切ることになりました

卓球はこれからも続けたいと思います。ユキオさん組んでと来年のオフィスビル対抗は是非優勝したいものです。ナミちゃんとマサヒコ君にはニコニコブロックでの活躍を期待しています

次回の練習会はミッキーさんにも声をかけてみます。徳さんやミホコさんと練習する機会があるかもしれません

トータルで200以上のアクセスがあつてとても嬉しかったです。ほんの数人ですが最後まで読んでくれている熱心な読者の方がいらつしやうたようでもありがたいと思っています。小説を書くのはじめての試みで面白いところも多かったのですが正直大変でした。そんなとき読者の方がいることを励みに最後まで書くことができました。本当にありがとうございました。またいつかお会いできるその日まで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1947d/>

趣味は卓球です。

2010年10月10日17時02分発行